女學雜誌

明治十八年十二月十九日　土曜日　第壹號

東京々橋區南鍋町二丁目拾壹番地　發行所　績文舍

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

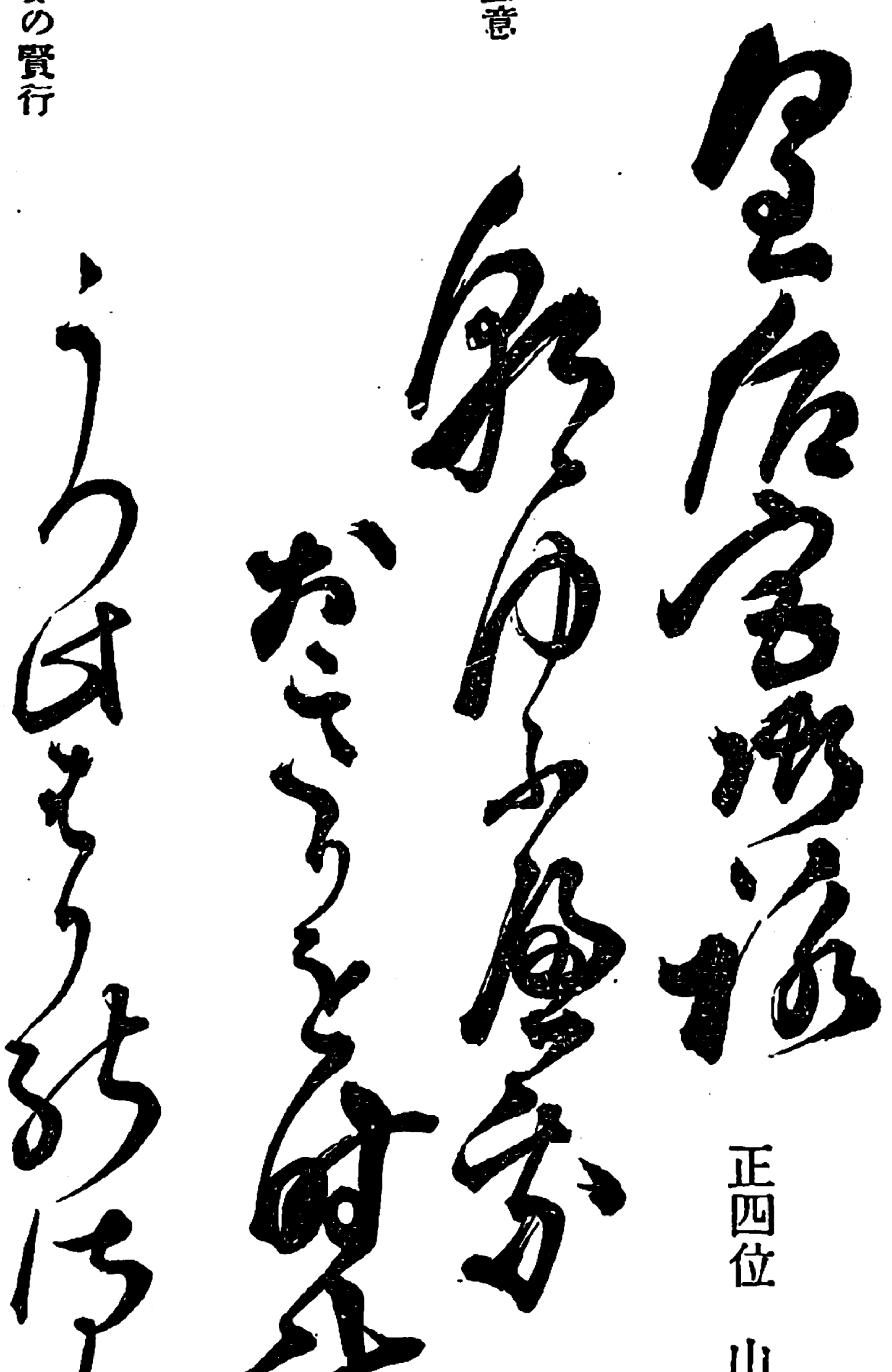
女學叢誌

第壹號

目錄

●女學叢誌發行の主意
●智徳兩立すべし
●蝶思花心の慰み
●内外雜報
●李景讓の母
●表書の傳
●鈴木宇右工門の妻の賢行
●梶原の妻の優美
●王章の妻　●記紀歌集莫囂圓隣之の解　●女蝶男蝶の弁　●山の根の詞
●舞蹈　●煙畫山水　●ベルリン、ウオルク　●化粧の巻　●天長節御歌會
●婦人束髪會のさかりあるを祝て讀はべる　●月を柄に　●書籍ハ役にたちませぬ
●西洋の隱語　●其二　●代脉　●教育　●赤壁賦　●行燈挑灯の誤謬　●扇よ物をうく心得　●十語五草
●心づけべきハ文字なり　●つれ〲草の講義

十二月十九日



正四位　山岡鐵太郎君書

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○女學叢誌發行の主意

田嶋象二稿

千早振神代の昔し伊奘諾伊奘冊の尊天の御柱を廻り給ふに當りてや伊奘冊の尊まづ憙にやし少男をと宜給ければ伊奘諾の尊よろこばずして女子の男子に言先だつハ不祥と戒しめ給ひけるとなん熟々惟ひみるに世の古しへ今とを問ハず國の西東を論せず事と物の順序ハ陽ありて然して陰あり天ありて然して地あるが如く男子の業立て然して後ち女子の業起るハ是れ自然ふなる神慮にして伊奘諾の尊の敎し給へる天地の大道人倫の大本なるべし未ダ會て男子女子に伴なハれ男子の業後に立て女子の業先に起る理由ハあらずかし若し夫れ女子の業先よ立て然して男子の業後よ起らば此れ天地の大道に戻り人倫の大本に背く者にして國の不祥是より大なるハなし是に於てか此の明治の豐榮のぼる御代となりしより歐米各國の學藝を採用し文物を進むるに當りて先づ男子の爲に大學を置き尋て小中學校を各府縣に設け以て智德研究の場所とハなしぬ首を回らせば今はし蟾ゝの澤渉きハみ青雲の向伏かきり學校の設けあらざるハなく賎の山樵の兒も磯采とり海士の兒も文字を知り道理を弁まふ之を德川氏政治を預かり申せし日よ比ふるは宜に天を換へ地を異よせし有樣なふめ而して此の天を換へ地を異よせし有樣の日を推究むれパ則ハち女學校の興起そる日にして女學校ハ男子學校の落成の當日に胚胎せりと謂べし故を以て先づ年東京女子師範學校を置れ相次て各府縣に女學校競ひ起り遂に本年の秋を以て我が聰明婉淑なる　皇后の宮にハ畏こくも華族女學校を設けられ御身親しく行啓せさせ給ひ學藝奨勵の令旨さへ賜ハりしハ皆人の能く知らるゝ所ろよして深く感佩し奉るへき美擧なりけり。女子の學藝を講習する所ろ斯く概むね定まり女子の智德を修むる期まさに斯熟したるよ其の側ハらに在て智育と德育を養成發達せしむる媒介となる女子新聞雜誌の稀々よして明ゆく空の星ハものゝハ雨夜の鐘の仄かにも耳にせざるハ何事ぞ。時いまだ熟せさるに由るか將た女子の目に之を見る知識あきに由るゝ何ぞ然らん世の浮たる女子の心を慰さむる物の本のみ將榮るが故に其一方にのみ偏よりて女子新聞雜誌を刊行そる遑なきよ坐するなり豈に慨てかふずや左ハ去りなから前にも申すが如く男子の業立て後ち女子の業起る自然からの神慮りにして人力の以て如何ともすべゅらざる所なれば深く怪しむに足らす亦た慨た

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

く思ふべきに非ず。今や男子の見る新聞雑誌具に備ハりてまた餘地の見るなし是れ女子の新聞雑誌起る日よして事物の順序を經過し來りし無此上幸の時と謂べし是を以て吾儕等敢て當らそと雖ども女學叢誌を發行し冀ねのハくバ日夜に勵み世の耳目たる新誌記者の任に負のず少女諸卿の前途に向ふて將に稗益そるあらんとす其水莖の跡のうすらかなるは固より大刃自の爲に物せずるあれバそにはかの論ろひハ自から甘んずる所なり

○論説

○智徳兩立そべし

女子ハ國の大本なり夫の文明と云も野蠻と云も女子の智徳如何に據のみ何となれば凡ろ世よ生息する蒸々たる人々ハ皆な悉く女子の兒なり其女子の兒あひ集まりて社會を組織し以て邦國を爲すなれバ女子ハ先づ其兒其邦國の爲に充分智徳を養成し而して其兒を感化陶治せざる可からず苟且にも女子に智徳なくんば其兒ハ果して如何の人と爲る乎女子の胎内に在る間だゟ母の不智徳を感受し生れて後ち更に不智徳よ化せられ以て不完全の人と爲るハ睹易き道理ならん其兒已よ不完全なり不完全の人の組織する社會ハ如何ん之を野蠻と云ひ未開と云ひ貶して下等の邦國と呼ふ凡ろ人ハ下等の邦國に生るゝを欲そるか將た上等の邦國に生るゝを望む乎萬口一同上等の邦國に生るゝを希望するならん斯く人ハ上等の邦國に生れ文明の空氣の裡に生息して快樂を得んとそる天性なるに其母が不智徳なれば其邦國ハ自から下等となり其兒ハ知らず識らず未開の人とならん斯る母ハ兒よ對してハ無慈悲の母と呼れ社會よりハ罪人の惡名を受く豈に悲しからず女子諸卿よ深く思ひ給へかし然り而ふして東洋の習弊として女子を賤めること甚だしく常よ之を社會の外に置き邦國に用なき者と見做し女子ハ唯だ裁縫或ハ厨内の事を掌司れバ其事已矣とし他ハ決して干渉せしめざりき此れ東洋の西洋に後れたる本源とも謂べし輓近茲に見るありて女子の權力を擴ろめ高等の地位を與へ且つ女學校を設け女子の智徳を發達せしめんと汲々日夜やまざるの奎運に遭遇したれば此の機會を失なハず女子ハ奮然として紅裙を蹴て起り以て國の大本たる責任に當らさる可らず慈母の稱呼を得ざる可ふず然るに近代の新弊として智徳ならび行く道よ上るや兎もすれバ智育の一方に偏よりて徳行を顧りみざるの有樣なり此れ憂ひべきの大なる者なり智力如何に發達するも徳行なくんバ文

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明の人と云を得ず邦の慈母と唱ふ可らず余儕嘗て舊女學新誌に於て論じたるが如く今の少女諸卿ハ云でも知るき第二明治の母にして愉快なる日本を造り出す大本少女諸卿の兒ハ則ハち大臣參議たり代議士たり文武の政とる關る紳士となる者あれバ決して智力の一方に偏して德行を顧りミされば其兒之に化せられて第二明治人民の不幸はたして幾干ぞや否それ第二明治人民の不幸のみならず其身もまた無慈悲の母の謗りを免れ可らず嗚呼少女諸卿に深く思ひ遠くおもんばかりて智德の兩立を忘れ給ひぞ

○歐米女學の枝折

孤月嶺風樓主人重譯

◎遊戲

○蝶思花心の慰み

少女の遊戲に種々あれども最殊勝にして知識の發達を助くる者ハ佛蘭斯の蝶思花心の慰みなり此の慰さみを爲んとせんにハ假令バ童男童女打混じてなす時ハ童男の方ハ羽蟲の名を取りて各々の名とし少女及び四五歲の女子の方ハ草花の名を取りて各々の名とし而して其兩黨の中より一名を撰みて胡蝶と爲すべし。偶々童女のみ合集まりて爲すにハ其混雜を分けん爲に二十人なれば十人を羽蟲の黨とし十人を草花の黨とし其中より撰み出したる胡蝶を直中に立せ兩黨ハ其回りよ半環形に列ぶなり此の慰ミに就て左の規則あり此れハ此の遊戲を爲す者の確に守るべき者なり

○第一則

童男童女相混じて蝶思花心の慰さみを爲そにハ必らず童男を以て羽蟲黨と爲し童女を草花黨と爲そべし

○第二則

凡そ兩黨に於て定めたる草花の名。羽蟲の名の外ハ別の花名蟲名を以て說話そるとを許さず假令ば玆に六人の童女あれバ第一童女を百合花と名け第二を鳳仙花とし第三を紫花とし第四を石竹花とし第五を雛菊とし第六を水仙花と定むべし若し斯く定めて游戲を爲すに當りて誤まりて水仙花を指して薗子と呼ぶ者あれバ必らず其罰を受くる者とそ蓋し此の六人中に薗子の名を附し者一人もなければなり又他の一方の六童女の如きハ羽蟲黨なれば名稱各々異なり第一を蜻蛉と呼び第二を細腰蜂とし第三を蜻蜓とし第四を蜜蜂とし第五を蠶とし第六を獨角仙とす斯の如く一定せしに誤まりて蝿の名を呼て說話する者あれば何人にても其犯則の罪を蒙むる者とす

○第三則

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

草花の名稱又ハ羽蟲の名稱を一たび附し上ハ其名稱にて一度限り說話し他の名稱に變るまで再た說話するとを許す

○第四則

園丁と云ふ詞を萬一云ひ出すとあれば草花黨の童女ハ各々其右の手を開いて伸すべし此ハ諸花の瓣を開く形容及び園丁が持來る清涼の水を悦こぶ樣を示すなり然るに若し童女の一方羽蟲黨なりし時ハ園丁と云ふ詞を聞かば皆々怖れる樣を示し悉く跳り上りて少しく後ろへ退くとを要すべし

○第五則

凡そ水甕又ハ花瓶の話を爲す時ハ草花黨の者ハ都て起立して其頭を昂くるとを盖し甕中の水を望むが如き樣を爲す爲なり然るに羽蟲黨の者ハ之に反し各々其膝を屈して其頭を低るゝとす是れ水中に落て溺るゝとを怖るゝ樣を示す爲なり

○第六則

凡そ此の慰さみを爲す者ハ此の下文を守らすんば可らすとを卽ハち大陽と呼び時ハ游戲者悉く起立して旭日の顯ハるゝを賀するの樣を爲し而して草花黨も羽蟲黨も齊しく相ひ共に欣喜の色を顯すとあるべし

○第七則

游戲の兒女各々巳が名の定まりし上ハ能く之を記憶し直ちに其說話を始むべし

○第八則

第四則第五則第六則中に揭けらる如き形樣游戲說話を爲し終りて後ち游戲者各々此等の規則に隨がひ再たび花名或ハ蟲名を呼び出すを待べし

此の游戲をなす者ハ如何なる事を說話するやの規則なし只だ說話する者の智頓と熟不熟に任するなり凡そ此の慰さみハ秀逸美麗を識認して意匠を高尙にする媒介となるハ假令バ各々其の巳が名の花又ハ蟲に就て其花其蟲の說明しを覺ゆると或ハ諸書の中より巳が性質精粗に能く適當する者を抄き來りて說話するに至るが故に知識と智頓を養成するに大なる益ありとす玆に此の慰さみの仕方幷びに其說話の趣向を具さに記して少女諸卿が蝶思花心の游戲を覺ゆる摸範と爲すべし〔未完〕

◎內外雜報

○敎育の過度　古昔歐洲にて有名なりし畫工コットフレイチルロといへる人あり其が友人某氏ある時氏に問て曰く君ハ常々染料を混和するに何品を用ひ給ふやと氏答て曰く去ればとよ予ハ唯々腦漿を用ふるのみと云ひしとかやチルロル氏の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時に於て既に然り我々當代ハ實に殘忍刻薄なる世の中にして智力の外さらに尊とむべき者なきが如しリチンプレイイフアール氏が近頃の演說を聴に其大略左の如し。世界萬國の競爭ハ唯これ智力の競爭なり去れば現今の急務なる初等小學の兒童に與ふる智識上の習練を以てするに若ハなしと云に過ず我輩の見る所ろハ大に之に違ふ者あり兒童に與ふるに專ばら知識の滋味を以てし種々様々の學術を以て之を飽食せしむる時ハ才智の一方ハ必らず成育すべきも如何せん兒童の体格ハ貧血性を來し其新鮮活潑の動力を減し体育を妨害すると少なからざるを怖るゝなり此頃大醫諸家の說に近代小兒の腦漿に賦税すると甚はだ嚴に過ぐるを云ざる者なし由て考ふるに我々が男女の兒童を責て偏へに頭力を働らかしめ之を促迫して迷やうに博識の者になさんとするハ果して不治の損害なると了然なりとせば我々が現時の教育法なるや幾分か兒童の純朴と快樂とを減少するものにして後生に對する義務を全たふせる者とハ謂ふ可らずと龍動繪入新聞に見へたり(十二月二日讀賣新聞)

○慈善產婆　醫ハ仁術と申して目下施療家も追々殖へ特に芝に共同病院の設けありしより貧民の喜悅一方ならず尚は斯る慈善の擧の起れかしと思ひ居し處ろ此の六月產婆學を卒業して產婆開業の免狀を得たる本鄉田町二十三番地瘋癲病院長加藤照業氏の女ろの子にハ世の極貧の者にして出產ぞるも其兒に着せる衣類のない者へハ遠近を論せず無謝儀にて施術のうへ紅木綿の綿入と襦半を夥多こしらへ置て施與さるゝとぞ無此上慈善の擧と云べし

○音樂　音樂の人生欠く可らざるハ今更ら云ふまでもなきとなるが我邦にてハ古來より音曲を以て婦人女子が一場の慰さミか左なくば瞽者の業の如く思ひて頗ぶる之を賤しめ貴婦人ハ之を學ぶとを耻とし給ふまでに及びたり蓋しこれ一時の流弊を見て一方に偏したる者のみ今日世界各國と文化の美惡を爭ろふ時に當りてハ決して斯る偏見を持べきに非ずもえに純雅の音曲を擇みて勵めて爲すべき業にころ是に於てか音樂取調所にてハ洋琴特別習學規則なる者を設けられ有志者の來學を促かさるゝ事となれり音樂ハ幼少の時に於てぞべき者なれバ父母たる者顧慮する所ろありたし

○結婚と出產　明治十五年七月より同十六年六月に至るまで三府四十一縣に於て出產の數ハ九十五万五千四百七十九人結婚の數ハ(東京千葉滋賀函館札幌根室の一府五縣を除き)三十一万一千六百七十一偶なりとぞ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○東京圖書館　同館にては上野公園内へ移轉の後ち二十餘名の寫字生を雇入古書の謄寫中なるが是れ和漢の古書にして未だ梓木に上せざる物のみを寫さしめ其原本を保存し謄寫したる分を貸與さるゝ爲なりと云へり

○娼妓學校　文化の波及するは何よりの中にも花明柳暗の吉原にては近來藝娼妓の風俗が日を追て乱るゝを見て忘八は大に心痛し斯く藝娼妓の風俗が善美ならぬは畢竟教育に乏しきゆゑなれバ廓内に一個の女學校を設立し營業の餘暇に讀書を習はせんには若ずと目下協議中のよしなるが果して行なはるゝ事なるや

○行啓　皇后の宮には去る八日午後一時御歩行にて假皇宮の乾御門より華族女學校へ行啓あらせられ供奉には室町典侍小倉權典侍樹下權掌侍西命婦平田權命婦岡本辻吉見の女嬬方を始め香川皇后大夫等の由に拜承せり同校生徒の榮光なぞかしと思ひ侍るなり

○建野知事の令閨　大坂府知事の令閨には大に時事に感ずる所ありて此頃熱心に英學を修められ同廳の外務掛浦嶋某は退廳後毎に必らず知事の宅に赴むき二時間づゝ教授せらるゝよし日々新聞の十二月八日の大坂通信に見へたり

○父母たるの義務氏たるの義務　大日本教育會員日下部三之助氏は栃木縣師範學校内に於て標題の如き演説をされしが其大意に曰く。今日の日本の狀勢は安閑として居らるゝ時に非ず父母たるもの民たるもの鋭意熱心其義務を盡して子女を教育して民たるもの力を合せて後來の國民の智德を研き身体を練り殊に尊王愛國の氣象に富しめ有爲活潑の風に導びくに非ずんば後來我が日本國の不幸幾干ぞ見よ敵國外患の動それバ四周に起らんとするを况んや今日は是れ現に智力の實戰中なるをや云々なりと十月十日出版の千葉縣教育會雜誌に見ゆ

◎内外烈女傳

○李景讓の母

唐の李景讓の母君鄭氏は性質嚴明にして賢を以て世に知られたり景讓青雲の望み達して重く朝廷に用ゐられし頃は早や白髮の班らなる年なりしが少しの過失あるも之を許さず必らず撻楚して後の過まちを誡しめたり景讓一旦浙西の觀察使と爲り母を奉じて任所にありし日其部下の將己れの意に背きたりとて大に怒り鐵鞭を振つて之を笞ち遂に之を斃しければ軍中

の諸兵頗ぶる憤激し將に一大事を企だてんと大に動揺したるを母君きいて劇かに聽堂に走り出で矢庭に景讓を堂下ヱ立しめ聲を勵まして之を責て曰く天子忝じけなくも汝ぢに付するに方面を以てす豈國家の刑法を以て一巳の喜怒の玩弄と爲すを得ん然るヱ妄りに無罪を殺す萬一任とする所ろの一方寧らすんば如何と爲す唯り上朝廷に負くのみならず垂老の母をして羞を含んで地に入しむ何の面目ありて汝の先人に見へんと則ち左右の兵士ヱ命じて其甲衣を褫ぎ將に其背を撻んとす將校之を見て急に之を留め種々爲に謝するを以て稍やく釋放せしかば軍中之に感動して平安に歸したりとぞ變に當りて之を所置す其雄略想ふべし

七

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

〇褒書傳　（一）

モラル レッスンス書名は左の一項を載て曰く一千八百五十二年ハトソン河に於て滊船ヘンリイクレイ號の災害に遭遇せし一話を想像すれバ人間に稀なる感嘆すべき心のあるを知るに足なり其話しと云は一人の母と少女と共にヘンリイクレイ號に乘しが航行中不幸にも暗礁に觸れて將に沈沒せんとするに當りて此の母と子の狼狽は一方ならず船の舳に泣き倒れ殆んど人心を失なひたる折。またもや蒸氣機關中より出火して炎々として燃あかる樣のすさまじく愈々危急に迫りたれば母子の生命は將に今絶なんとする處ろへ一人の義士進み來り余は力の限り御両所を救はんと思へども單身なれバ一人の外は救ひ難しと云い放ちたり。之を一樣尋常の人ならしめバ力らなく之を慨つか若くは只だ已を救はれん事を望むべきに。此の少女は左はなくして義士の顔をつくづくと眺め両顔にハラハラと涙を流し母と接吻して暗に死別を告ると齊しく直ちに身を跳して漫々たる水中に投して敬愛する母を救ふの機會を得たり。後に其の死骸を捜し出し厚く葬式を營なみしが聞く人これが爲に其身親から悲境に陷ゐりし感情を起し大に追悼したり云ふ

此の少女の將に死せんとせし時從容母を救はんとする孝順の情は猶は其冷やかなる死骸の胸中に存するや又如何なる至孝の心を以て其の身を水泡に歸せしやは蓋し其慈母の外に知る者なかるべし噫

〇鈴木宇右エ門の妻の賢行

天明四年の飢饉の状は聞く者をして戰慄せしむる凶荒なるが。就中奥羽を以て甚しき境なりしと云へり。時に出羽の庄内に鈴木宇右エ門と云ふ者あり餓莩道路に相望むの慘憺たるを見て惻隱の心ろ制するによしなく乃はち家財を盡して窮民を救ひければ其妻も亦た秘藏する所ろの衣服髮飾りを傾むけて賑恤を事とせり。一日所夫に向ひ昨日箪子を探りて尚は一枚の衣を得たり。請ふ之を賣て以て救助の資に充んと宇右エ門之を止めて申しけるは婦女の最とも愛する所ろは衣裳なり然るに吾女今之を盡して顧りみざるは眞に賞すべしと雖ども他日門を出るに弊衣を纏ふて貴行は心に愧る所あるべし。妻之を聞て妾はまて之を思はざるにあらねども衣服頭飾は復た需め得るに易く。人命の得がたしと豈に比す可んや飢饉茲に至り人々朝夕を保たず此の際此の時妾ひとり何の顔ばせありて奇羅を飾りて市街に徃んと遂に悉く之を賣拂ひて飢者に與へた

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り又一日大に雪ふりて湖風凛烈たる曉 童兒ありて門外に佇みて食を乞ふ之を視るに敝衣肩を露はし面色憔悴恰かも幽冥の人の如し。妻乃はち丐兒に指さし其娘に語りけるやう。女よく彼の丐兒を見よ吾女と年齢ほゞ同じ。然るに彼は慘狀斯の如く吾女は安穩斯の如し宜しく一衣を脫て彼に與へよ吾女に在ては寒を忍ぶに過ず彼に在ては則はち再生の思ひなり吾女之を思はざるやと。少女は之を聞て欣然一笑し忽ち着る所ろの一衣を脫て之を丐兒に與ふ。夫妻あひ顧りみてそゞろに淚をたれたりとぞ此の夫妻にして此兒あり陶冶の重き知り給ふべし

○梶原の妻の優美

源の頼朝卿一日高殿より中春の四方の景色を御覽じありし時氣高き女房が芳々しき櫻を折て女の童に持せ御門のすへを通りけるを見て

殘りなく手折て見ゆる櫻かなまたこん春はなにをながめん

と御近侍の衆を以て申しつかはしたるに其女房とりあへず

出るいきの入をもまたぬ世の中にまさこん春も頼まればこそ。

と返歌申したりければ頼朝卿優にやさしき者なりとおぼしめし宿を見て參れて見せられけるに梶原源太左エ門ノ尉の妻なりけり。其後ち緣や盡たりけん梶原其妻を離別せるとするよし仄かに上聞に達しければ頼朝卿は大に惜き櫻の返歌したる女房去る可らずと仰せ下されければ梶原も思ひとゞまりて鴛鴦もとの水に復り偕老の契りをなせしと云ふ

○王章の妻

王章諸生たりし時。妻と長安に居しが一年病に罹り頗ぶる困難を究めたるも家貧の故を以て夜具なく之が爲に牛衣中に臥し將來を想像しては常に妻に向つて涕泣嘆息したれければ妻は故意と勵まさんが爲に之を怒て申しけるは仲卿(字なり)若し朝廷に立ば必らず貴人。誰か仲卿に踰る者あらん。今僅かに病の故を以て自から激昂せずして反て涕泣し給ふは何等の御志ざしぞ。後ち王章望み達して遂に京兆と云ふ大官に拜す。一日王章封事を上つらんと起草す妻また之を止めて云は人は當に足るを知るべし良人何ぞ牛衣中涕泣の事を念ひ給はざる。王章の曰く此れ女子の知る處ろに非ずと。更に之を聴ず遂に封事を上る。事忌憚に觸て果して廷尉の獄に下る。妻子みな坐して共に繋がる王章の少女年甫めて十二。一夜起て大に慟哭して母に謂て曰く平日獄舍に於て囚人を呼に其數九名なり今夜八名にして止めり我父君平生素剛なり先づ刑せらるゝ者は

九

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

父上なふんど明日之を問へバ王章果して死せり
呉長卿曰妻能料生女能料死雖然其妻可及也其女不可及也
評得允當

○女學

◎記紀歌集の莫囂圓隣之の解　　丈我翁

莫囂圓隣之大相七兄瓜謁氣吾瀬子之射立爲兼五可新何本の歌ハ幸于紀温湯之時額田王作歌なり齋明記に四年冬十月庚甲朔甲子幸紀温湯と云ふ是なり。契仲が代匠記に莫ハ禁止の辞にてナカレなれども唯ナシとも讀り囂ハ左傳杜預註に喧譁也と云り堯の時老人ありて日出而起日入而息と云ひ又陶淵明が詩に日入群動息と作れり去れば陰氣に應じて暮れば靜になる心にて莫囂を夕べと讀るか。圓隣とハ十日過る頃ろ月も漸やく滿大に見ゆれば七八日ハ夫に近づけば斯ハ書るにや云々と言れ。眞淵が萬葉考にハ莫囂國隣之と讀せられ神武天皇紀に依るに今の大和國を内國と云つ。偖て其内つ國をさやぎなき國を書たり同紀に雖邊土未消餘妖尚梗而中洲之地無風塵てふを同意なるにて知ぬ。斯て其隣とハ此度ハ紀伊國を指なり。然らば莫囂國隣之の五字ハ紀乃久爾乃と訓すべしと言れ。本居の玉かつまにハ莫囂圓隣之と讀せたり。其說に莫囂ハ加麻と訓すべし。加麻と書るよしハ古に人の云を制しておなかまやと云るを其おなを省きてかまとのみ云つらむ。其ハ今の世の俗語にも囂を制してやかましと云に同じ。囂と云なればかまと云て莫囂と云ふ意なり。偖てかまやまと云ハ神名帳に紀伊國名草郡竈山神社とある是なり。國隣ハ夜麻と訓すべし山ハ隣の國の堺なる者なれバ斯も書べし。國の字ハ本にハ圓とあるを一本に國とあるなり云々と云ひ。荒木田久老が信濃漫錄にハ莫囂圓隣之と訓じたり其說に囂しき事なきハ耳なしなり圓ハ山形にて倭姬世記に圓奈留有小山支其許平都不良止號支と見えたり然れば莫囂ハ耳無山なり耳無山に隣れるハ香具山なれば莫囂圓隣之ハかぐやまと訓ずべしと云り。此等の諸說殆んど夢裏に夢を解に似たり丈我案ずるに莫囂ハ契仲師の解を得たりとも何となれば莫囂喧とハ夜なり羅隱が詩に西風九月竹樹秋。萬喧沈寂登高樓と秋夜の体を寫せり實にも夜ハ萬喧沈寂なる者なれバ夫子も寢不言なるべし。偖て夜分の体ありて下に圓とか輪とか規とか鏡とかなれバ必ず月の事になる。釋貫休が詩に從來天匠爲輪足自是人心此夜。又た陸龜蒙が詩にも圓蟾霜輪などゝ作れるにても知べし然らば莫囂圓ハ月なる事あきらかなり。而して月にして圓なるハ望なり今

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

それに隣れると云ば翌日の乙丑既望の夜のとなるべし。故に其我は莫囂圓隣之の五字をモチヅキノと訓せり此は齊明紀に四年冬十月庚戌朔甲子幸㆓紀温湯㆒その時額田王の作られし歌なり庚戌の朔なれば甲子は十五日にして月は圓なり其圓に隣れるは既望十六日にして乙丑なる左の圖に由て詳知すべし且又此時の帝都は大和岡本宮なり大和紀伊は櫛比の國なれば一泊にして紀伊の國なる室の温泉に着き給ひならん而して其一泊なし給ひし處は紀伊の磐代あたりにや有んか。其は何に由て詳明すと云に本歌の次の中皇女命の御歌に君が代も我代も知るや磐代の「日高郡に在り」岡の草根をいざ結びてな吾瀬子は假庵作らそ草なくば小松が下の草の苅さね。云々とあれば也

齊明帝四年戊午十月大

庚戌朔日	辛亥二日	壬子三日	癸丑四日	甲寅五日	乙卯六日	丙辰七日	丁巳八日
戊午九日	己未十日	庚申十一日	辛酉十二日	壬戌十三日	癸亥十四日	甲子十五日	乙丑十六日

齊明紀同年十一月庚辰朔故知㆓十月大㆒也

天皇發㆓岡本宮㆒宿㆓磐代行宮㆒此夜(莫囂)月圓

天皇到㆓紀温湯㆒

隣

○女蝶男蝶の弁　　秋齋間話

婚禮に女蝶男蝶を用ゆる事小笠原流等にて別して大事とす元は蝶鳥なり蝶は蠶の蝶なり蠶は子孫を生付て絶ざるの義を取り鳥は尾長鳥にて本名山鵲忠孝の鳥なりと云ふと禽經に見へたり故に此二種を用ひらる堂上方のりろめの扇の摸樣のなめ等にも今に蝶鳥を用ゐらる事なり御膳方より調進する蝶鳥も其通りなり其蝶鳥を取ちがへて縁由ある樣に女蝶男蝶の目出度事に用ゆ。常の蝶に何の目出度とのあるや。朝に生じて夕べに死し甚はだ不吉なる者なり其わけを知らずして口傳などと云て目出度がるは一向夢中の沙汰とや云んかし

○山の根の詞　　同

山の根と云は頂上の事なり富士の根と云ば富士の煙りの立つ邊を云ふ麓の事と心得て歌に讀るは怪しむべし甲斐が根も甲斐は嶮岨にして峯々あらはれたる体なり家の頂上を家根といふにても知るべし峯又嶺をミネを讀も深根なり偖て深の字をみと讀とは水より起れるなるべし深山と書ても大山と書てもミヤマと讀む大をみと讀は尊とむ詞にて御と通ふ大玉大柱らの類にして君を大君と云ひ家を大家と崇むにても知るべし大の字ハナハダともアナとも訓ず穴賢も大賢なり穴は假字なり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

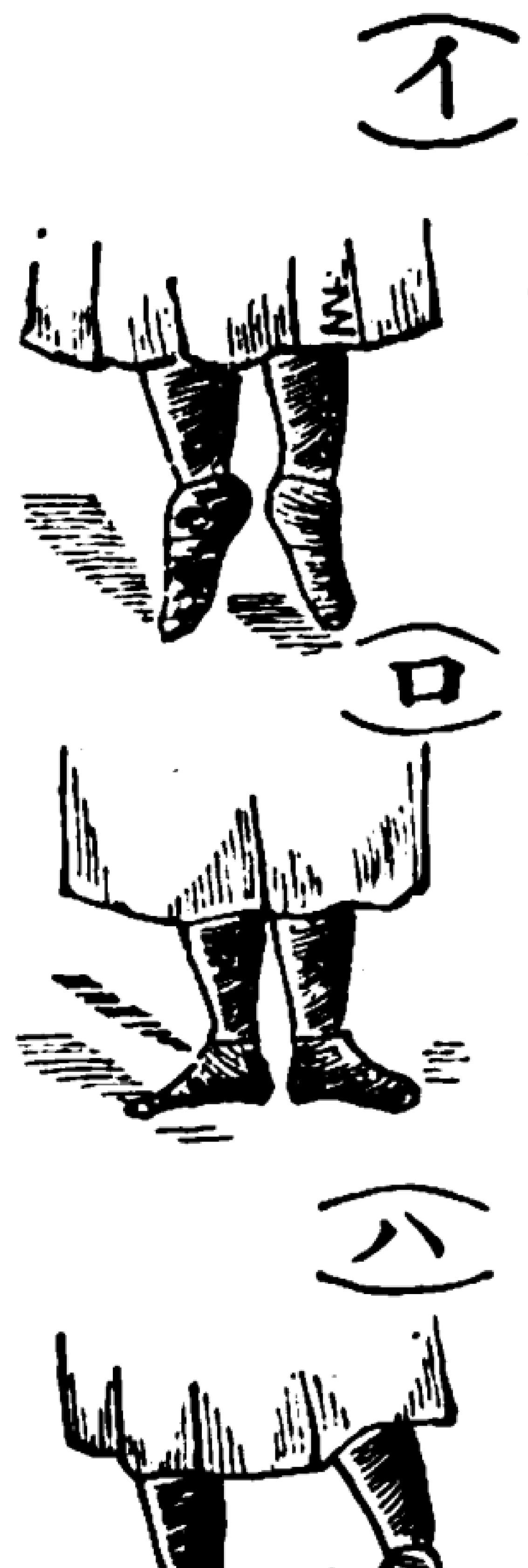
○舞踏

舞踏の遊戯ハ唯ゞ外貌の奇麗且つ温雅なるを増進するのみならず亦た能く身体の健康を助け情意の快樂を爲し常の逍遙及び動作するに於て四支の機關を快活にする爲に甚はた切要なる技なりとぞ。然り而して舞踏の形容ハ時の流行に由りて屢バ移り變りて一定なし。已に舞踏の式樣を稱してポーイトリー、オフ、モーション即ハち活動の詩〔詩ハ詞の華やかなる者〕舞踏ハ運動中の活發たる者故に斯く稱するなり」と云ふて知べし凡そまづ舞踏を學バんとせバ歩む法より學ぶべし猶ほ彈琴を學ぶに先づ指の運び移りて習慣そるが如し古の舞踏にても今の舞踏にても共に先づ歩法を敎ふる者にて之を舞踏學の初歩となすなり。地方に於て良師友の敎ふべきなき時ハ左に擧る歩法を最とも有用とす而も常の歩行の醜体を改良するにも亦た緊要なりとす故に此の遊戯を習熟せんと欲する者ハ必ず下に示す所の法式に由るべし

第一。舞踏者ハ〔い〕圖の如く兩脚底を地に着け而て後ち唯だ足の指先にて踏ミ佇すむと〔ろ〕圖の如くし或ハ踏み又ハ佇すみ或ハ足趾を下げ再三幾度もなく疲るゝまで斯の如くなすべし

第二。舞踏者ハ兩脚の位置を〔は〕圖の如くし而して後ち從容に其右脚をして脇と正直線に動かしめ足趾の指先を踏たゝずみて脚の指節を屈して丁の樣に搆ふると〔に〕圖の如くす此の如くして遂に其脚を地より擧け空中に鼓動そるの樣を爲そべし此遊戯者ハ其右の臂を直線に趾頭に觸しめ其体ハ全たく直立に爲して此の運動を程よくするなり此の運動を爲すときハ必ず注意して臀尻以下を勞役し腰を動かそことを禁ずべし

第三。舞踏者ハ〔は〕圖の位置を取り其片脚を以て前面に動かし他の足の指先に返すと同じく〔は〕圖の如くなそべし而して頭ハ正直に爲し其腮を腰とハ少しく内の方へ傾ふくを善とす斯く運動する間ハ兩膝ハ必らず緊直になすべし或ハ兩膝を弛緩て佇立み或ハ身体の重みを兩脚の一方へのミ入る等ハ甚だ拙劣とす此の演習稍や熟する童女にハ常に其頭に一冊の書を戴ゝらせ室内を歩ましめて身の直立を習ハしめなバ其童女ハ甚はだ温柔なる擧動に馴るの一端となるべし夫れ斯の如き運動を日々反復演習そるときハ舞踏師を得て敎導を受るの日に當りて大に稗益する所ろあるべきなり



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

（ニ）

（ホ）

◎女紅

○煙畫山水

煙畫の山水ハ歐米に於て專ハら行なハるゝ少女の慰さみなり此の圖畫法ハ徒然の寂寥を慰さむる愉快にして最とも殊勝の技藝に屬せり而して其結果ハ意匠を雅馴よ高尚する完全の演習となり且つ縫繡又ハ〇〇〇レイスを製する摸本を心に造り出す下心となれば決して賤しむべき技藝にあらざるなり

之を爲すの方法ハ先づ厚き洋紙を適宜截て蠟燭又ハ點火の上よ翳して油煙を取り然して刷手を以て其燻べし所ろを拂ふ斯くぞれハ洋紙ハ唯だ微々たる黑色を帶るなり是に於て更に再たび油煙を取り自から適宜なりと爲すまで之を黑くし其後ち修筆刀又ハ洋筆を斜めにして自から描かんとする者を畫き或ハ搔損て景を寫すなり斯の如く畫くが故に黑面に白き處を生じ又其油煙にて別の黑處をも現ハるに至る

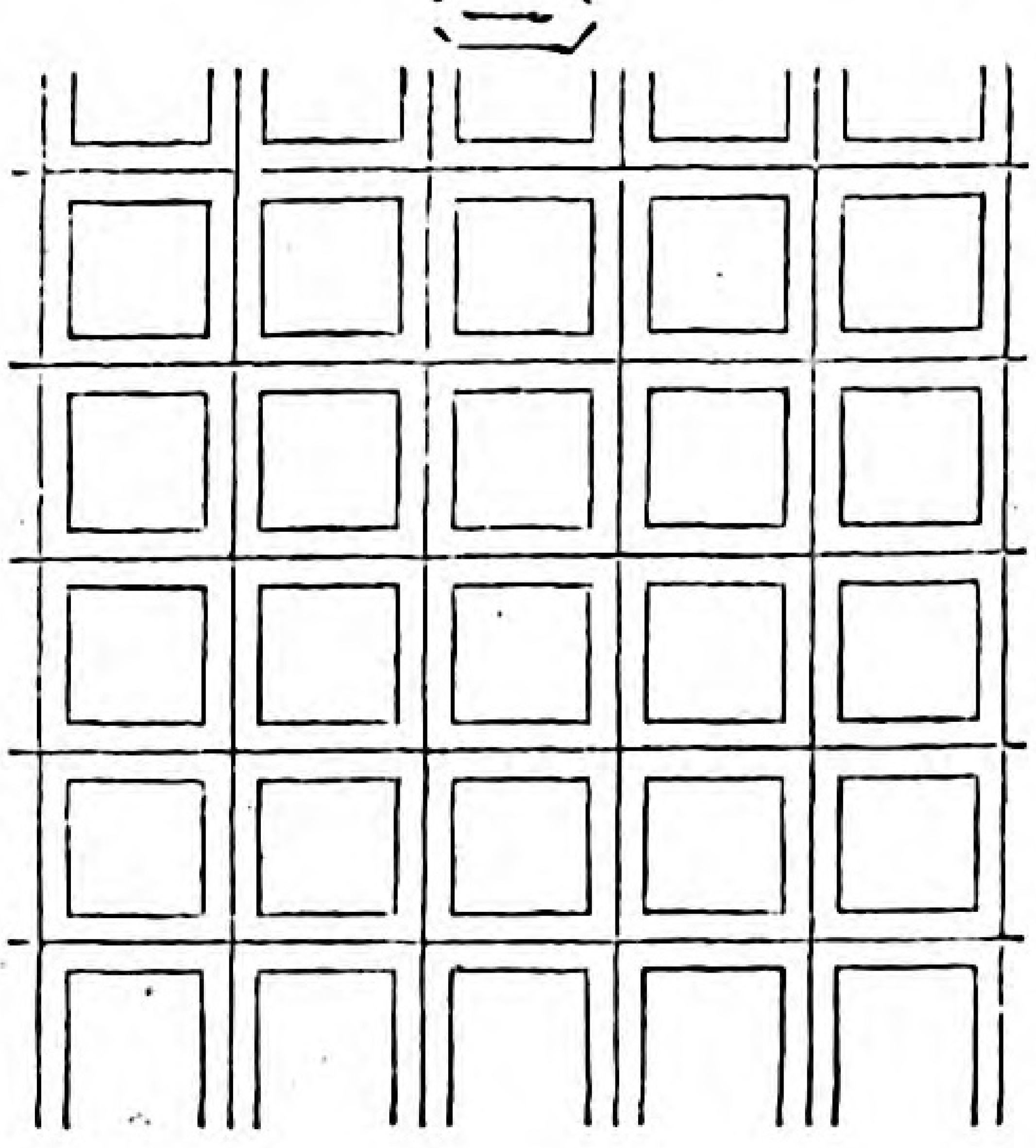
遠望の山嶽若しハ山水或ハ月夜の朦朧たる圖畫なぞハ最とも

適當の者よして眞に愛玩すべき奇觀をも摸し出る者なり

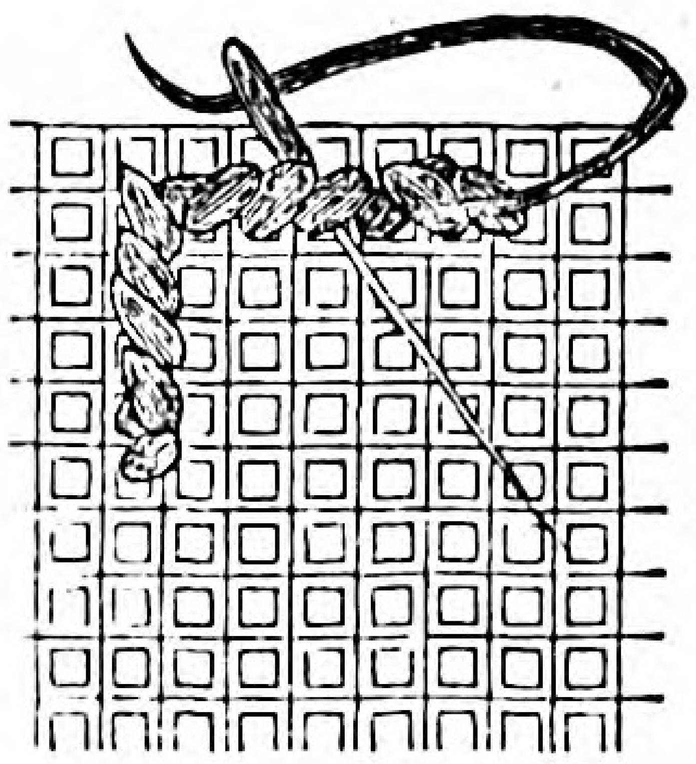
○ベルリン、ウォルク

此の縫繡の業ハ小童女に習ハしむる手始めの物と做す何となれば年歯四五歲に至る小童女ハ此の業よて容易よ種々の美好物品を造り得る媒介となればなり。之を爲すに入用の者ハ綿毛線〔羊獸の毛を撚る物。〔但し木綿糸を四五本より合せたるもの又ハ眞綿を太く引てもよろし〕長き針〔但し孔の大きなる物〕粗き目の布此三品なり針ハ成たけ尖頭の鈍きを擇むべし粗布の下にある自からの手を刺戟を防ぐ爲なり。さて布の一面よ〔一〕圖の如き畫を目を拾ひて摸し前後に針路を作りて縫べし其縫始めに針り步びを進む列を爲すや其向ふ所ろハ必らず左よりして右に至るべし第一の列を造るや右よりて左りに終るべし是にて針步びハ終る

（二）



（三）



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なり斯くの如く同し樣に縫ひ至れば容易に美麗なる縫繡を爲すとを得。是より進步それば種々の花形をも縫ひ得るに至るべし第二圖を以てベルリン、ウオルツの手ほどきを覺ふべし

○化粧の卷

凡そ都會の女子は詞さはやかに優はしく身体の動靜みやびやかなるが故に其容貌紅粉の色を假らずして自から嬋娟たをやのなるが上に化粧に巧みなるを以て都風とて專ばら賞め羅はるゝなり抑々同じ天地の間に生を得しもの多少風土に變りありとて都會に限りて美人を生し鄙なりとて醜婦を生ずるの理あるとなし蓋し美と醜との差別は都人は其顏に似合しき化粧を施こし身に恰合そる衣類を着するが故に醜婦も埃ぬけして美麗く見ゆるのミ鄙人は假令生質美麗にして妖艶なるも化粧あしくして其顏に似合ず衣服奇羅を盡し數百金を費やすも摸樣色合ともに其身に恰合するや否やの有樣に迂く且つ着樣調のはざると身体の動靜りぎくしきが故に美人も醜くに見ゆるものなり試ミに其理由を謂んに鄙の婦人一たび都會に出て二三年住なれ而して故鄕に歸れば容貌俄かに能く見へ都女子になりたりと人こぞりて之を賞美し緣邊を申し入るゝ者多きに非ずや畢竟そる所ろ都會へ出たりとて低き鼻の高ふなり短き脊の高くなるにあらねど紅粉の化粧容儀の取まはしにて自然と美しく見るのみならず低き鼻を高くし短かき脊を高ふ見せる方法を知るが故なり此の化粧の卷は化粧の傳身体の動靜の秘事を漏さず記しぬれば如何なる醜女或は雛癖ある容貌態度と雖ども方法の如く化粧なし給はば忽まち口唇紅玉を含み白臉明珠を曜やかし翠りの眉綫く紫ひ雲の鬟儼に花の容月の貌百媚百嬌を具する美人となると何の難き事かあらん此の方法は楊貴妃の秘する所ろにして三千の寵愛を一身に歸せし寶書なれば實に婦人の千金方と謂ふべし尚ほ茲に化粧は如何なる德を含むやを一言して浮たる女子の誡しめとなそべし

凡そ化粧容儀そるは愛敬を得。女德を修むる源もとにして身の汚穢を淨め禮を正しふするの本なり。身淨ければ心ろ自から正しく古の聖人も婦人の四德を擧たまふ中に德容と並び稱し給へり德とは身を修め家を齊のふを云ふ容とは容儀するを云ふ容儀とは化粧して容儀を正しくそるを云なり心と容ちとは本と一体にして化粧し容儀正しければ心ろ自から淸く父母に事へて孝となり嫁して舅姑めに事へては我が父母の如くし夫に事へて貞となり他人を敬まひ召仕の者に慈悲深く貧きを

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

惠み長を尊とみ幼を愛す皆な心容より出るなれバ晨に起てハ裕らひ鏡に向ひ化粧して容儀を造り心の鏡に向ひてハ惡を遠ざけ善に移り曲れるを直し正に順かひ給ハゞ此ぞ女の道を守り化粧の誠を得しと謂べし。日々よ磨き時々に化粧し美麗く装をふと雖ども心の化粧たゞしからず頑愚にして少しの事をも罵しり怒り妬み他のあしきを悦こび善を謗る心あらんよハ顏色の化粧も何の益かあらん能々心ろして心と身と同じく化粧なし給へかし

以下次號

◎群芳詞苑

○天長節御歌會　御兼題　紅葉映日

華頂宮都子

露しぐれ染しもみぢバいとゞしく照す日かげの匂ふけふかな

德大寺ノ實則

あかねさす夕日に見れバ紅葉はこゝの重ねのにしきなりけり

近衞ノ忠熙

露しもの染つくしたる紅葉のいやますいろハ日かげありけり

福羽ノ美靜

天津日のけふの光よもミぢばも照てそまされあきつしまやま

高崎ノ正風

さしそたる旭のかげにしもとけてまゝふもきバかり照もみぢ哉

松平ノ慶永

大君の御代のひかりもそはるらん朝日に匂ふやまのもみぢバ

津輕ノ承昭

きのふより又そめまして夕日さすみねの紅葉いろのさやけさ

大谷ノ光勝

時雨してあとの紅葉のひとしほハ照すもふ日の匂ひありけり

川田ノ剛

朝日さす雲ゐの庭のもみぢ葉ハやまと錦のこゝちこそすれ

多治比ノ象二

○女用文姫鏡の品定の繪に

ます鏡うつすすがたのいろ〳〵に心のおくも見ゆるなりけり

同じく

○田舍の立冬

霜ふかきまがきの菊の枯がれて手にいきすなる今朝の寒けさ

山田ノかう子　上毛

○女學叢誌の發兌をほきて

ひらけゆく二ひら三ひら御代の幸みよとや書の現れよけり

増田ノしけ子　東京

○女學叢誌の發行を祝ふて

白玉や黄金やはなやあやなしてまじろくまでに織いだしけり

畑戸ノかね子　同

○同

小くら暗まよひの道のしるべとて窓のほたるの照すなりけり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○立秋の日よめる　　蘆野ノ明日香　磐城

ちりそむる軒端の桐のひと葉こそ悲しき秋のはじめなりけり

○婦人束髪會のさかりなるを祝て讀はべる

東京木挽九　風外　居士

麗はしき緑りのかみの昔しより結むすびたり少女子よ女な子それと色ふくも縁しの幸もかみにして乱れてゑにし教へてもろれとハなしよ結むすぶ時の流行も皆ひとの此の身ハとけて釋やらぬ心のうちぞ恨とあるとなそれ〳〵と結まどふとの筑紫の神かけて願ひも誓も人々の今ハ昔しとあらたまる御代のいさをし總へて女の髪もうるはしき束のよきを習はして皆な人々よ人々よ束のよきにならハして開くる道に進めよや人

○御伽草

○月を柄に　　丈我翁

月に柄をさしたらバよき團扇のな　此句山崎宗鑑が發句に清冷の意味言外にありて妙なり。去來抄に魯町曰く月を團扇に見立たるも物好ならずや。去來曰く賦比興ハ俳皆よ限らず吟咏の自然なり凡そ吟に顯ハるゝ者此の三を放るゝとなし物好とハ言ひ難し云々此説よしと雖ども此ハ宗鑑が僧虎關が詩より取來りしとを知らざるなり濟北集に

玉斧何時修得成。等閑爲レ柄插ニ蟾輪一。青冥風露多ニ涼意一。未レ動ニ搖間已冷レ人

○書籍ハ役にたちませぬ

容貌うつくしき娘を持ける女心ろよからずして之を歌妓になさん者と思ひ學校へもあげずして或る盲人の弟子となし只絃糸竹の道をのミ學ばせける一日其娘稽古に往んとして本挾ミを忘れたるゆゑ母ハ呼かへして。ナゼ稽古に往に本を持て御出でないと小言を云しに娘ハ振かへりて否本があつても役よ立ません御師匠さんハ御盲たし私しハまだ字を知ませんものを下々の女子を教育する此類多し憂のハしき極みにこそ

○西洋の隠語

余ハ愈々低き處ろよ至れバ随て愈々長くなり又若し最とも高き處ろに達それバ則ハち最とも短かくなり（紙鳶の糸）

○其二

余ハ鑛山より採出されて竟に木製の函の中に推籠られしが以來絶て函の中より出し事なきも毎日數萬人の爲に必用の事務を爲せり（鉛筆）

○代脉

或るはやる醫師の許へ夜の二時ごろ急病につき唯今御いで下

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

されかしと申し來りしに委細承知せりと其使を反せし跡にて今夜ハ雨もいかふ降ゆゑ吾子代脉に往て給ハれと書生を車に乘せ雨覆ひを充分にして出しやりぬ。書生ハ眠けれども先生の言ひつけなければ是非なく車に乘てぶら〳〵眠りながら往に車ハやがて病家の門口に來りけれバ車夫ハ大聲よて頼みませうと云へバ書生ハ車の裡にてフト目を覺しドウーレー

賤しき者が暴かに富貴になれば斯る例し少なからず

○敎育

或人學校の敎育宜からずと思ひ其子を携さへて敎師の許よ往り彼此論じければ敎師ハ冷笑して足下ハ我と令郎と倶に死をるとを望み給ふかと問ひしに其人さらに解せずして考に苦しみければ敎師ハ然らば云ん我が敎育法業に已に尽たり最早我身を令郎の吐裏へ推込むるのみ我れ入ば我ハ悶殺し令郎ハ脹殺ん

學校敎師の幼童の爲に勞する思ふべし

○赤壁ノ賦

或る嗚呼なる男子一夜其夥多を集めて前後赤壁の賦の講釋をなせしが固より生物識なれば字の讀方を知らず朗聲大言して前の赤壁の賊やアと讀む適々偸兒ありて之を聞き大に驚ろき思ふに彼れ我の所處に潜むを知れり若ず裏口に往て深更入んにハと時よ夜初更なり嗚呼先生講釋終り後房の寢所に入り復た其徒と後赤壁の賦を論じ更らに後の赤壁の賊やアと讀む偸兒外よ在て嘆息して云ふ吾が前後の潜伏悉く此人に知らるゝ家々這樣なる先生を置バ洋犬も飼よハ及ばぬ

未曾有をミゾウィウと云ひ或ハ焉馬を誤まる人にハ無此上いまし尖なり

◎机の塵

○行燈桃灯の誤謬

行燈とハ今の桃灯にして桃灯ハ今の行燈なり行の字天子の行幸の向の宮を行在所と云ふ此のあんにて知るべし何の頃にか兩方入ちがへたり今さら更ため難かるべし

○扇に物かく心得

扇きに物かくハ骨へのゝらぬ樣よ書べし人形花鳥などあらバそれを避てかくべしと信實の記に見へたり

○十語五草

○竹取物語 ○うつぼ物語 ○世つぎ物語 ○いや世つぎ物語 ○續世つぎ物語〔大鏡とも云〕 ○ます鏡 ○榮花物語 ○狹衣 ○水鏡 ○伊勢物語 以上を十語と云ふ

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

○徒然草　○枕草紙　○四季　○御飾の記　○御湯殿の記

以上を十語五草とて嫁入の具なり集棚に餝る法小笠原よ習ひあり

○心づけべきハ文字なり

昔しより何々除の御札とて宮寺より出る物の内に刀難除災難除又ハ雷難除なぞと記しあり斯る書ざまにてハ災難除雷難除となりて何の詮もあるまじ心ろすべきハ熟字にてこそ

◎つれ〴〵草講義

任天居士

〔一段〕つれ〴〵なるまゝに。日くらし硯にむかひて。心にうつりゆくよしなしごとを。そこはかとなくかきつくれば。あやしうこそものぐるほしけれ

〔つれ〴〵草〕つれ〴〵とハ徒然の義にて俗の閑の意なり草とハ笑ひ草かてち草の類なり此ハ吉田の兼好法師世を慨つとありて諷諭の旨を含めてものせしなれど打つけに其義理を名とせんとを憚かりつれ〴〵草とハ名つけしなり〔日くらし〕徒らよ光陰を消すの思ひなり〔硯にむかひ〕何となく硯よむかふ手習よ人にいふべき思ひあらねバの意と知べし〔心ようつりゆく〕經曰譬如明鏡現衆色像の意よて心ハ鏡の如く萬鏡うつり來り衆色うつり去るの義なり〔よしなしごと〕無始無終由て來る所ろなしと云ふなり〔そこはかとなく〕楞嚴經曰情想合離更相變易。とりとめもなきの意。又神無月のせに紅葉のちるときハ。そこはのとなくものぞかなしきの意にも取べし〔あやしうこそ〕怪狀の義〔ものくるをしけれ〕物狂ハしけれの意を兼て謙退の辭なり◎以上を序文と爲そ

いでや此世よ生れてハ。ねがハしかるべき事よそおほかンめれ。みかどの御くらゐハいともかしこし竹のそのふのすゑ葉まで人間のたねならぬぞ。やんごとなき一の人の御ありさまハさらなりたゞ人も。とねりあンどたまはるきハゝゆゝしと見ゆ

〔いでや〕發語なり〔みかど〕帝なり〔いともかしこし〕最も可畏にて恐それ多きの義〔竹のそのふのすへ葉まで〕竹園とハ親王の御事にして皇族諸王を廣くさせり〔人間の種ならぬぞ〕此花是非人間種再養平臺一片霞。此花是非人間種瓊樹枝頭第二花みな親王の御事を云ふ〔やんごとなき〕賞稱へたる辭〔一の人〕攝政關白を云ふ職原鈔曰執柄必蒙一座之宣旨故稱一人〔さらなり〕殊更の意〔たゞ人〕攝家の下ハ悉く凡人なれど下文に。その子うまでまてはふれにたれどゝあれば中少將の人を指も可なり〔とねり〕舍人なり近衛府の隨身を云小隨身ハ家々に在ど近衛の隨身を被許るを擧とすれば斯ハ書り

〔以下次號〕

十八

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

本誌代價幷ニ郵税表

壹册	正價金四錢	此郵税壹錢
拾册	同金三拾八錢	同　拾錢
二拾册	同金七拾五錢	同　二拾錢
三拾册	同金壹圓拾錢	同　三拾錢
四拾册	同金壹圓四拾錢	同　四拾錢
五拾册	同金壹圓七拾錢	同　五拾錢

但シ東京十五區郵税不申請

本舍ハ御注文有之と雖とも前金御送附無之間ハ雜誌配達不仕事に內規相定候に付御注文の節ハ必ず代價郵税共郵便爲替又ハ通運便にて御送附あらんことを希ふ○郵券代用ハ御斷り申上候萬一不得已御場合にて郵便切手を以て代價御送附の節ハ(一壹錢切手にて)一割増を乞ふ○郵便爲替ハ芝區芝口郵便局へ御振込ミ其爲替券を本舍へ御送附可被下候
但し東京十五區內ハ御斷り無之間ハ引續き配達仕候

廣告料定則

一行二十七字詰	壹回分	二回分	三回分	四回分
自一至十行	八錢	七錢	六錢五厘	五錢
自十一至二十行	七錢	六錢五厘	六錢	四錢五厘
自二十一至三十行	六錢	五錢五厘	五錢	四錢
自三十一至五十行	五錢五厘	五錢	四錢五厘	三錢五厘

曩きに廣告以來陸續御注文に相成り未た第壹號發行不致に已に數千名の御注文者あり弊舍の幸榮之に過ぎず然る處端書のミを以て御注文相成方も僅々有之折角の御注文の義に付第壹號ハ見本として送呈仕候へ共第二號よりハ御送金の上に非ざれば送本不仕候間此段豫て申上置候也

會計敬白

一活版印刷物ハ期日を不過廉價を主とし鮮明ま印刷仕且教育書類ハ尚五分引致し遠國より御注文の節ハ可成丈見本御遣し被下適當の見本無之時ハ文字の大小何行何字詰及び寸法和紙か洋紙か厚薄等御示し相なれば詳細御答可仕候也
但し郵券二錢御投與の事

活版掛敬白

廣告

○歐米女權
中村敬宇先生序　湯目北水先生編纂
全壹册　定價三十錢　郵便税四錢

○清國漫遊誌
成嶋柳北先生序　副島種臣先生閲　曾根俊虎著
正價金四拾五錢　郵税自便

○婦女庭訓の眞鏡
東條竹翠著　繪入かなつき
全壹册　定價三十錢　郵便税四錢

○女子作文楷梯
七條峯太郎編輯　女子必携　鼇頭作文要用字類
和製中本全壹册　定價金貳拾貳錢　郵便税四錢

○明治流行うそ八百
滑稽新話
壹册正價二十錢　郵税四錢

○忠經旁釋
漢馬融撰　日本佐藤楳先生旁釋　木板手刷
正價拾錢　郵税四錢

○明治英名傳
正價金三十錢　郵税共

○人間長壽法
人命保險
正價郵税共三拾錢

○東京高名鑑
正價二十五錢　郵税共

此書ハ府會議員、區會議員、新聞記者、演説者、詩文書畫の先生、代言人、等を掲載したる重寶の本なり

一右書籍の外逐次出板書籍廣告仕候間續々御注文を乞ふ

一弊舍ハ數十年來活版印刷と書籍出板とを兼業罷在り因て他店の書籍と雖とも御注文有之ときハ其店にて賣る價を(割引あるの品ハ其店の割引の通り)以て御取次仕候尤無手數料なり又女學雜誌御愛看諸彦に限り東京府下千葉縣下出板書籍御購求上にて御尋有之節ハ郵券二錢御遣あらば諸店問合の上懇切に御回答申上候也

東京々橋區南鍋町
貳丁目拾壹番地

績文舍書籍掛敬白

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

千葉師範學校體操敎師馬場壽先生著　美本全一册
訂正增補 **小學徒手體操新書** 第二版
馬場壽先生著
定價八錢　郵税二錢

○**啞鈴體操新法** 美本全一册
馬場壽先生著
定價金十錢　郵税金二錢

小學生徒 **美容術**
馬場壽先生著
全一册定價金、六錢郵税二錢

訂正增補小學徒手体操新書 **圖解**
農學士菊地熊太郎編述
定價金六錢　郵便税二錢

○**化學理論一班** 全一册
嶋津倉治編輯
定價金二十錢　郵便税金六錢

明治新刻 ○**日本溫古類聚** 全壹册
小池民次序
定價金三十錢　郵便税金六錢

新撰 **小學遊戲書** 全一册
馬場壽著
洋本仕立小本　插密圖
定價金拾五錢郵税金四錢

千葉本町壹丁目　**立眞本舍**
東京大賣捌所　**績文舍**

新書發賣廣告

○**茶の湯客の心得**
全一册廿三錢　郵税八錢

○**英文單語獨案內**
全一册四十錢　郵税十錢

○**音曲獨稽古**
全一册四十錢　郵税八錢

○**夫婦衛生論**
全一册四十七錢　郵税十錢

○**遊藝獨稽古**
全一册三十錢　郵税八錢

○**裁縫獨稽古** 一名女子の賀
全一册五十錢　郵税十錢

女子作文記事論說文範 全一册四十錢　郵税八錢

○**西洋夫婦事情** 全一册十五錢　郵税四錢

○**明治烈女傳** 全一册廿六錢　郵税六錢

○**袖珍英和繪引** 全一册十六錢　郵税四錢

○**英語獨案內** 全一册二十錢　郵税六錢

右何れも郵便切手代用を諾す御注文書着の卽日送本可申上候

大阪江戶堀犬齋橋南詰東入 **書肆旭香舍**

東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地
發行所　**績文舍**
持主兼印刷人　松本義弘
編輯人　山田常治

客員　田島象二

女學叢誌賣捌所

東京芝區愛宕町一丁目三番地　大賣捌所　**修正堂**

同神田區淡路町　巖々堂
同神田區雉子町　團々社
同日本橋區新葭町　良明堂
同牛込肴町十七番地　活神堂
同芝區愛宕下町二丁目　高棚堂
同本郷區本郷三丁目九番地　盛春堂倉田
大坂府備後町四丁目　岡嶋支店
同西區江戶堀南通一丁目　旭香舍
千葉縣千葉本町一丁目　立眞舍
上總國武射郡松尾　高林銀藏
江州彦根西內大工町　新々堂
勢州津京口町　郁文堂
陸前國仙台大町四丁目　木村文助

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY